潮來婦志後編 上

へ 13
3820
4

冊號 六
夫 小
函 乙卜

潮來婦誌後編附言

今茲文化三丙寅三月廿初旬。丙丁の災に罹りて志ばらく営生を休むの間。柳齋主人小露に誘れ。杖を江東に曳て下總佐原に赴く。一日香取の宮に詣て帰路を潮来より促し。娼門に登りて遊楽する事一晝夜。翌日舟中に想を發して且發端を編。又萬葉堂に帰りて再び筆を採りて凡五日

門 へ13
號 3820
巻 4

にしく著述撰を悦ぶ。夫詩歌連俳に遊ぶ徒は心の趣くまゝに随ふてよし。又随て撰む。されば紀行も行嚢に蔵して自ら独歩の心を養ふ。吾党は戯作者にて雅中の俗なりて俗中は雅なり。故に専ら稗史を宗としてよく戯謔の書を作り人をして頤を解しむ。彼詩歌連俳に遊ぶ徒。更に臨んでよくよくの如く是則吾党の心の趣く所にしてこれ潮来婦志を著せし所以あり。志ゆへよくども地理に疎く。人情に通ぜざれば。風土の方言。娼門の規矩。齟齬錯雑多く。杜撰甚しく恥て廣く世に布くるに絆さず。漫に寛なく出さずして深く帳中に秘すと而已

江戸

遊戯堂三馬

凡例

○言語ハ大概江戸に因るといへども清音と
五音の調子によりて清音と
濁音ハいつもその間に交へし

○清音を濁音にて通用とするを
「サシスセソ」「カキクケコ」「タチツテト」の二音と
「ハヒフヘホ」を清濁をしく叶ひをしく
江戸のならし

○常の「゛」ハ通例の濁音にあまくして
かしこハおのく「゜」印のところに白圏と
點して「ガ」「カ゜」より二濁をわかち
就中「が゜ぎ゜ぐ゜げ゜ご゜」の音に清音の濁るかの
あり　又「タチツテト」の音に清音の濁
あれども是を「だぢづでど」如く黒圏を
用ふ。餘ハ推して知るべし

月水不順を治する名方
式亭家方 天女丸
代百廿四銅
[illegible]

此潮来婦志乃一篇ハ。家翁が著述数十種の一種に
して北総佐原漫遊羇窓の手澤なり何某が代作して
古人の名を売世の中の眼をくらますまでのかぶせものなれ
年月こゝに定るや二十六年数ふといへども洒落と観流行
にかくあるは故将しが実に風来が戯作の正統を継ぐ味噌にとて世に伝ふ
しきかね鳥の日吉似ておる一滴ずるま今更に生ぬ麻の入ぞ遠
本町庵の忘れがたき江戸の水ハ数頃息子女の曉ぬ泥

御頭乃薬吾妻香製法乃向

天保十一庚子仲秋

式亭小三馬題

潮来婦志巻之

江戸　式亭三馬著

よるれありさま

鳥ハ稲荷山の森に栖でさへずり。人ハ
園部川の岸に小舟を浮めて遊ぶ。虫の声ハとめられ
ぬ流るゝ小田乃蛙のなく音もおのづから
物淋しく。山寺の晩鐘夕陽をさそふ蜩

に夜見世の仕廻を済せれバ。まての座敷の騒
唄も絶て。かしこの部屋も口舌の沙汰なく楼上
志づまりて寂然として廊下に足音稀なり
只きこゆるものとて厠へかよふの音ばかり生酔鼾
におどろかされものゝ
あやしむ [むら吉] 妹女郎ところへはかりに
[若者] 四角なるあんどうをさげ。行燈
めんぞうをもつてきてよべをとさげ
おまへさんが敵方ふとんへもぐりこミ江戸者をおこしてやらうぞ
めまじくを蔵人ハ。能女に我ながらしらずして。さまぐ〳〵な私
ぐさ。そ〳〵の夜着をこしらへた。左と右の黒交の生地鼠色の足で

これが女郎か。とべらぼうな女をお御所さまとうつすハ青面
金剛さまと庚申塚の猿を加て仕拝に足しげく。
秋露童子さんとて石佛をぶつて寝れバ吸売
とおし見へるかせう。草鞋の泥を二ッ蒲団へ塗り
落されしか。そろ〳〵帰る時 [川竹] 此お客ハ
いつからかをとひやかまさと。腕めに化されて見
おさんし。おやとよくさるがらへ。いつぞの女郎ハ
石佛じやアござりませぬよ [吉] 石佛とはどうりで

石佛の面でも紅の頭巾とかぶりて一疋の馬の
衣を裾の方へ付紐を筋違にして着てみる
あるは猿がかなるが。でもそれが中々石地蔵は石の
肩から錫杖のあたりまでくるでかけてあるから。
かる石の手から玉をとりて四角にまではつておる
所で。せめて本像から箔代建立に仕上げで
を入るべいが。その人はふにきつてかで。瓶子の濱
じやア腕がさわるとはやてが。いてその下蜂じやア
何ぞ頭をさまつおんなどんぶ合せ 川柳 何
もてらりまし給へ。せんぞりお飯食てこ客を
よくくみやまと。あすへぐことばきにいつぬでも古顔
に愧でも暮るお客がめりこめれまり安くしこく
草かどして。かまんでひとるに呼ぶを給へぐ
の夕。一寸の虫にも五分の魂といふでその女郎にも
もり ぐゞぐゞりゆうとへ 吉 へどでもとらくくての際くで
むしがめいりや一口と食はれるとものかうるくはんぞ

とこんだらうさヒト 御飯粒のお目通りもならぬ上方へむしやうが
わるいからよ 江戸のことを去年でも物知らぬ者の云ふ事
甲し中宿が上る来て豆腐のわりし伊勢屋の油揚を
風呂きりの汁はんぺんに味噌をたつぷり大根と浸しやう
もろざれで江戸者を悪くいふもさき清くへ江戸者が
猿ども かく飯を食ふから白米のお飯を喜ぶとて
むりをいふから江戸ちやア カラ丸むやごさ言ふからよ
百の店賃と掛を・常食ひよ云をとよく常
平生鮨布ぐあがらぬ嵩の上向ふ魚をとらぬよく食
上方人こちやア濱瀬の鋼く上方人東の子ざ。京紙の中
の仕うなんかくえんつけ生見かごぶんとおき己が
手さへのく中宿とようしやアがれ

川竹 ごまめてんぼ、只わされてやのそあ こう わが浪花さん要らしこぶあれはさこぷあさくハ ト ぐぐつくええ御下へ生まをもつて

川 わのされまる上方人でのう ト

田舎亭主 旦那さ良いぐあされまのしさ

吉 いつぐと鯖が七し上方人が。あの女も江戸者を悪くいつてトキ

よそ外の女と出しては世間へ見えがよくあるまいぐらいへ 【中】旦那さまの気でもどうも済みませぬ。もし御勘弁なされませ。ござりませぬへ。御亭主さまへお内儀さまへまことに今さら御意にいたしませぬども、御了簡なされてくださりませ。こんなことで御ざりますと、せめてお座敷へ出しませぬに、お座敷の内にお置きなされば、娘なれども、あの子さへ出さずとも家の内でもでるへ女郎さんで御ざりますれば、よいのさ。でも内の方にはあるまいねへ 【吉】そこよく呑込んでいろよ。まことに山も地にもなく汲み紙ばかりで御ざりますがそとられんのさ。よいが盆に来ても、かりがねさ。座敷の深川、あの女がよくてもわるくてもワタシがいやがる。これがやらの事を、肴と言ふにかはらいで、塩梅を買ふてもよいわな 【中】それでも良でござりませぬが、今後でも外の女の方が出ませぬで 【吉】ハテ出すでも他の内へはいらず 【中】外の内へお出しなされば又若者さはお違ひよそも同じことでござりませうが

ト中居やと吉が論一向かまはず

帚を逆さまにするかぎり吉が来くり 【鉄】 コウ 先刻(さつき)から様子(やうす)を聞(きい)て居(ゐ)ればあの子ハ
きんくしき吉が来(ざ)じやァ面白(おもしろ)く経(へ)さうだ。外(ほか)の子ヲ
こしらへて。何(なに)も是(これ)が座の押引(おしひき)をするじやァあるまい。雲(くも)
助(すけ)が立場(たてば)へよつて飯(めし)を喰(くひ)ながら茶屋(ちやや)の利屈(りくつ)とは違(ちが)ひァ。
茶屋(ちやや)の婆(ばゞ)が昼(ひる)の内(うち)からあの女を囲(かこ)つて置(おい)て表(おもて)と
あつて見立番(みたてばん)をとるやうじやァ思召(おぼしめ)しもあるまいぞ。夫(それ)ゆゑ
出来(でき)ぬから わたしと一所(いつしよ)に引(ひ)くのヘ 【中】 イエさうでご
ざりますとねが サテ そりや ト中居が面白をるを 【めが浪】 中居によりそひて

旦那さまエ そうして でゑへ 如何しても 出ませぬ 清汐
さ様でも出(ぐ)ざんしやります。此頃(このごろ)ハエ おまへがたもチット
お聞(き)なされて禄へても。さ様さ。かつて仕舞さんなりますさ
時、差当て大衆(しゆう)とたして子(こ)に成(なり)ましエ 【鉄】 能(よ)
じやァ後(のち)へ 【吉】 ウ 名(え)てで名前でも新造(しんぞう)でも江戸者が婦(こゝろ)経へ
せんがいて 【中】 ナエ おまへさん婦と申(まう)してござりますぬ ハイ
【めが】 清汐(きよしほ)とは清らかで和(やは)らいで能(よ)うござりますと 【鉄】 なん
あるその浪とやりョ 【中】 只今(たゞいま) ト中居もとゆく 【鉄】 不粋(ふすい)さされ

てへあの子が何画合さ [吉] たかゞ二文くらゐさ
[後] その上に見立絵が馬鹿押の絵へとまる名の通りさ
[お] あの子は出ずつ゛ぶんその身を遣ずんべへ影絵道
志ぶ事る。○背中さるぐの紐しくわれどを付けるれバわき
さうくるとる内中さ宿より送り猫まり。食すとるりく怖く寝る
[ちよんがり] 二人つれ出て今事り床の屏風とあいさんの に
のけて、客のまくらもとへ立てぶらり居る
気紛浮くとみさまる。今一人のちよんがりハふところより
らうそくを出してめんどうくさうにしく客の顔の先き
つき付けて [吉] こゝを其 何ぞ人の顔とみやアがつて面
らしくみえる
向くに促しわれがをかしくとみえてどてをもるので [ちよんがり] かせざ
屏風とわけて後が顔と志ろりとまり [吉] あのかくかせざ
いけぞんぜへ。ふらり寝てみる屏風とわけて。みよん
きうと浮ら立て。ぶら〳〵。ぶら〳〵。ぶんのま孫ざらう
[後] おつかてと紛せるぜ [お] われハ隣の内のちよんがりが
おさ母くと見んぶくるのさ [湯汲] 己が方のお客が外の
内せ場でくみる絵見付ると。若イ者とむかへにまゐりまさと
[後] まだアおくびつてござの [二人] アイ [吉] 六朝の肉紙
一夜あく〳〵ふ見んくわつく役ハ大家ぶとんぞ [湯汲]

もうらァおござりますが私へおがんでもかまひませぬ移へ夫(それ)まで
こと人が散(さく)ばんべ志ござりましたけれど。こちらまひませぬへ
[吉] まうちの臆(ぜう)が移るござ [こち] 何エ。志ちやの移へこども
おござりまし移への中。
一体此所のおうちハ年くすびこの客人私の家の女郎
を置へ置きとさければお客ぞの方お会ありてハよなきさ
すびこ所ともて私の女をふすびむ附合け仕舞と
まうう茶屋むすびこの床津ふようて二十人又ハ
廿人十人と人数違ひありむ此内中宿のまくるさ
あるく五人弐ハ三人と書切るあり是を中宿の並
ふみて加ぐ仕舞の人数と書切るなり
[illegible]
ぞうり出くる双方のあいさつの女きまへて深々と徳ハつくなき
まけ仕舞と何人さそさといふて龍のよぶれぬとよろこび
欲よくふかくハぬ仕方おわりあし　但しまけのまるき
客のあれバ女郎屋の徳用向なり [中宿] 又あらく後でらくうへび
旦那さまチットおあふゆりさう　おござりますと [孩] ヨイ
[中] 私でもおざりますとね。若(わか)イ者(もの)がやりますと　やりますと
[孩] ハテナ 何ぞ [中] イエ 旦那さま方へ若イ者がやりますと ト
やりますと [孩] 何の用でおあへの中やう [中] イエサ さあまでおり
ござりますね若イ者が旦那さまがやりますと　やりますと

ら。私申ますのでござりますと　鉄　若イ者が何といふ
のさんぷりゆゑ。今すがのあの家へ若イ者と
済れて来るがいゝ　中　イエサ家へ若イ者を済れまし
て来て申ますとね只申ますとゆゑ見れ拾
方へ出て候ふ申ますとが有てもよござりますと
右申ますのお咄と申ますと　鉄　アヽ何か。さやうさ
申ますとトハ若イ者が何ぞ出して祝儀を貰ふといふ
ものゝ。それから家じや「アヽ申ますとよ。そのゝ　中　ハイ

出来てござりますと　鉄　それ何とふよんで呉
此家らが。只今の主が御いでかから　中　ハイさうでござりまする
旦那さまはまづ三日ほどよ。夜分か朝まして下され裏
を門前でござりますと。若イ者が申ますとと申ますとも
ござりますと。それからあの見れ様申ますとまで
まづ二申ますと申すもござりますとがおちゝの
因れさまを如何とおぼしめしておかれますか申に
ますとも申ますとね　鉄　コレまアハあるいさぞきこぜ

おいら二人を茶屋と付る中の痴話して通して無て
なぜその役から昼の内に婦人昼の内が初会で
おらがあれば寝ごしらへに小中のくるが後人おいらア
それが独り者がなるもされちやアおいらア後
[弁] デモおまへさん達さつきにおかかさんも後人
師がなれもお似合なされませぬ。差イ着がやりますと後
やまとてよろ商の實錢ござりますと [後] 玄関
とくそれなれのまつのあ地じやア。中南山とよつてみい
條目にめんくらひあうしう [中] 伊丑さまちつて
ござりませぬが一向納まり又 [吉] 扨て あんさ女中様へ。
六百の女と罵く二朱からり出てやりを五百よく／＼
甘く云ふ法人衛をさへさつてが。きんさ板がよいふ月
まつと甘くいふざ。昼のけだいの掃くよくそへいりう
まんが女くが。かくどふる二〆目百酒が二升の六〆百ヨ [中]
イ丑 お酒どうへお燗がよろしくござりますと [吉] ウヤ
アア酒が二升よく上酒にしてが七百ヨ。外に藝者が

二朱。是ぎ二朱ト三貫百とおかしい銭かゞでツりぐ
【中】イヱまんざ是ふちゟ及びまとねそんなこすせん 皆庭へまゐり
おいとりくまつりませうト云ての 【吉】【鉄】
何のこのさわつかしろうも孫へ。中まさしくまするとう私
やしまとツ。二朱や二朱をよけいの仕ずと者あへめん
でもと孫ぶらんのろふされちやアるとへ不合孫へ
○此でく「中まきヒトしよちに若とのよう宮へ三度の物」と出しく南條一行外せしめるよ此心の適り詞あり

【鉄】田かりし宮守孫へ不為母孫のさ此孫の咎トたでさとりん不也へがきさん
上六ござるかのひんさうへしくきせるとえて 【中】よくいつて
浴るとさんのお中りまさよ 【鉄】ホイ起くみゆるの。おかるア
又よく拝べるみなさまそんさ。そんなにおれもそんべる
べい 【吉】孫さ孫ぎ。中宮のぎんぐこや。おい孫へさん
ちさぶぜん。まりつる遠てもおのふさなおうら喚
てかせし みなまふく卜六たのをもとつて方言気のきゝて皆
抄く郎ぐらとのろくぎく。利にふはぶうふ見るそさい
よつりも傳孫へ。わかる袖孫へ至くと。みんどやめんどや

と名のつく男で　みんなが〳〵や十六くらゐさいの神さま四ッ五ッの者が似ても名のつかぬ者へ［吉］伯父ア
結へ。婿しま入りと八ツ前に冠ぞうりをかいた　コウ　油汐さ女と
中ゥ　チヨツト　本結へへかで　たいを結ふる道理でやわしら様へ
そこものぞ［三］十六　結ひ目ア東ねし　結へヨ［吉］コレ　其人のくん
ざ。まんざらよく子でござ十六ろう［三］アイ　よくわかりました
［吉］これからハ二親ある［三］イエ［吉］片親　親父ア
［三］イエ　かゝぞ。さ女サ［吉］フム　加様か家てゐる［三］イエ　伯母ご様
の和尚様の家サ来ましていろいろ古の村へ。内
置てある結作がいろいろ家サよろしく髪の紙
覚させると云つけましたら。それまでふたつまで来
ろっぷン。おとしよく　お家に出まをするがたゞされると
とその村志ありましたヨ［吉］あゝいふおかさんござりやア。手
めへあくる結へる［三］十二ぐらいサうちへはかまでおかさま
どうもあつてもそひもし縁へ［吉］夢てあかどと
あつてもおかどは置ておかまでれいかといつもの十
［三］アイサうまいつちう。我がやくむかうでねえわたしまをとふヨ

【吉】エゝちくしやうめ。ぬかしやアがつた。ハテてめへが物をいひやアがりやア
おれを又ぐるにするのか。合棒（あひぼう）ハちつとハいふ
めんど。猿ぬかし何所の馬の骨か牛の骨か素性
しれねへ奴でも。拾つて一人前の男にしてやつたも
のぢやア。三尺の桜木の根のからみ。放蕩無頼でも
ぞ。ハテ一樹のかげ一河の流を他生の縁といふ
ことをきかねへか。てめへ又江戸ッ子とぬかす
なりやア女房の身の上を案じるのぢやアねへか。めんどうな
へらず口をきいてくれるな。わつちや聞くめへ
と思つてもしみじみ嬉しいぜ。おれも男ぢやア
ねへか。けちな振舞ハしねへ。わつちが命ハ
一ぺんの修行者のやうに捨てて仕舞つて來
ちやアならねへよ。どうせ死ぬならよくよく思つたがいゝ
と誰しも身にしみたかの若衆のやうにいふのぢや【三】イヤ
【園】てめへ何をいつても。アレくどくどと嫁菜の
の小浪でおくれへ。チツト性でも直さなくちやア

【三】何をいふやらぞろ〳〵まあ客へ【吉】ナニ客へのわる有(あく)
らんが揃れが仕舞(しまい)て置(おい)てよくくづれてゐるのや【三】
何だ豆【長】コレサ忘れ坐敷(ざしき)でもまづめかけ(かけ)る
うらぞらも娘(むすめ)が客へ【鶴】コレ吉やよく忘れてる事
【長】てあへちぢみかも床(とこ)の世をとりて遠(ちか)ウ【鶴】ナニ
せいらうハ床をかせぐとも何のわさ【吉】ハテ床を
かせぐうら客をかせぐといふの〈【鶴】いゝ床をかせぐ
さぞらちハかんさふじやさうなかつきも出しておく。
たまんつくみりやアぬひくり枯梗姫ぐ〳〵何の此ふ
さきやア野郎(やらう)れ不束(ふつゝか)奴(やつ)め【吉】そんなことぬかす気(かんさ)
【鶴】癇気(かんき)なこといつて指(ゆび)でもさしやアがると擲析(ぶつくじく)で
【吉】ナ夕いふておりやアるて野郎(やらう)呼(よぶ)りをあやアがる
さあ才(さい)かやアまあちぢ合点(がつてん)しまへで【鶴】野郎よくぶう
くやくいふ相手(あいて)あるやれいふその罪(ざい)まで来て床(とこ)
踊(をど)りだくそられちゃアせいてやいのおくへとめ(めく)世界(せかい)かゝるい
ハい想像(そうざう)かぬかて実不くハれ野郎(やらう)さア【吉】おれも

らねへと連中がみんないやがると思ってるから一所に来さ
モウおめへ宅へ別れてかへる所へ[医]どうでもよい帰ろ
まア今夜やアがれ コレヤイ鹿島香取のお札と帰りやアがれ
おれなぞハ三枚もらって[医]取て何にもならねへ是
持ていやや江戸へ帰ると勘定して置くらゐ
が母かる年の志れさ奴を今おもつてやらう
今日までの雜用をおれか方で立替て弐朱
卜六百六十四文トつゝせ[医]中で遣ってとるからそれか
[吉]よろしくまづおもア八文ツの茶代と廿五銅
掛りが二ツ割十二銅半ぶてよろしい。まづおめへの
分ハ番ちやが三文ツの団子が五串一皿十五文掛
ねハ三ツ喰ってのおれが二百合せて三文割と
なってらア。[医]コレけちなかみもぬつとなさいねが金へ
江おれが金が今日遠のくみへるじやアねへか。先おれが二両
しく金が三十五の伯母にかりて二朱トいくら私が貸さ
一分。地傳で一夜いてきといふ金で何も角も残ず

よこしやアがれ けりんくるふ女郎ハあきれて皆〻かゝり、下さへくハ
若イ衆の中ニ四五人かどふを来り、血ハ血を洗ふ
おどろいたお客りのあいさつまで
双方をおどろかしてやりくふ志ぐゆる 【中宿】是ハおや中まで
とどうぞ紙踊りせずくチトお騒がさりまし トンびどもぐちやん出
サア〳〵おざ浪さんをも湊汐さんをもお出なさく
ソレ加へ仕舞又おかみぶり
イヤア そうりこく